



背後に雲仙普賢岳がそびえる抜群のロケーションの中にハウスがある



【ミニトマト農家】

江城裕二さん

まだまだ農家4年生

内に秘めた**真っ赤な情熱**をトマトに捧げる日々

諫

早市森山町にあるビニールハウスで、ミニトマトを栽培する江城裕二さん。高校卒業後、神奈川県で就職し、忙しく駆け回る毎日が続く中、いつしか「自分で事業を起したい」という気持ちが出てきた。そんな時、ふと思いついた幼い頃の記憶。水を張った田んぼに映る青い空、黄金色の稲穂が頭を垂れる姿。「実家が兼業農家で、米や麦を作っていたんです。小さい頃は手伝ったりもして、農業は身近な存在だったんです」と笑顔で話す。そして4年前にUターンした。

しかし、意気込んで帰ってきたものの、農業経験は実質ゼロ。実家を継ぐという選択肢もあったが、両親とは違う分野で頑張りたいという気持ちの方が強かった。そんな時に県の技術習得支援事業の存在を知り、農業研修を受講することに。「不安な気持ちはもちろんありました。でも周りも農業初心者ばかりだったから、同じ方向を向いて一緒に頑張れました」。その時に出会った仲間や講師は今でも大切な相談相手であり、良きライバルだ。

一年間の研修を終え、江城さんはミニトマトを生産の相棒と決めた。幸い、選んだ土地は干拓地のため土の中にミネラル分が多く、そのおかげで糖度の高い甘いトマトが育つ。「粒は大きめで、口の中で「パンッ」とはじけた。江城さんの人柄のような、元気で優しい味わいだ。

二年前には地域の幼稚園に通う子どもたちを対象にした収穫体験を開催。トマトを収穫する時の真剣な表情や「おいしいね」と食べる嬉しそうな顔が忘れられないと話す。「自分が育てたもので人を笑顔にできるんだ」と以前にも増して作業に熱がこもるようになった。江城さんの夢は森山町のミニトマトを全国一のブランドにすること。挑戦はこれからだ。

熱心に指導してくれる先輩農家、時々手伝いに来られる両親、他愛もない話に付き合ってくれる友人。四月には子どもが産まれ、家族も増えた。「農業をやり始めて、いろんな人に支えられて今の自分があるんだと思えるようになりました。やっぱり地元元がいいな」。周りの人たちのおおらかな心に包まれて、江城さんは今、好きなことで生きていく幸せを実感している。

名前のおり、宝石のような実が鈴なりに連なる「小鈴」という品種を栽培。収穫は10月～6月で、主に関東方面へ出荷される



「自然を相手にする仕事はあきない。はたから見れば単純な作業を繰り返しているようですが、手をかけるとその分だけ応えてくれる。だからおもしろい。」